

「四恩」について

——仏教福祉思想試論(1)——※

清水海隆^{※※}

1 はじめに

仏教に見出される福祉に関連する思想が、歴史的に見るならば儒教のそれと並んで、東洋における主要な福祉思想を形成してきたことは周知のことであろう。一例をあげれば、吉田久一は東洋社会事業思想の二大支柱として、仏教の慈悲思想と儒教の慈恵思想とをあげ、特に原始仏教の福祉思想として、慈悲・菩薩行・縁起・空・戒律・衆生観・布施などをあげている⁽¹⁾。また利他行をキーワードとする大乘仏教では、菩薩行の代表とされる六波羅蜜(布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧)中の、布施・持戒を中心に仏教の福祉関連思想を考察するのが一般的である。特に、布施の中の財施を拠り所とし、その優先的対象を福田とする援助思想が重視されている。しかしながら、布施を考察する時、「田のよく物を産するごとく、これに施せばよく福を産ず」という福田への布施の必然性の考察が不可欠である。

本小論は、このような観点から、布施・福田思想の必然性を考察する一助として、仏教における「恩」の思想を取り上げ、その内容および展開について若干の考察を加えるものである。

2 恩思想の展開

恩の語は、日本においても一般的に倫理項目の一として用いられている語であるが、語源的には儒教的用例と仏教的用例が見出される。この両者の相違について平川彰は次のように述べている。

仏教倫理の特色は別解脱戒によって知られるわけであり、とくに「二五〇戒」の一々の条文を検討することによって、その特色が明らかにせられるが、……しかしそのような条文化せられた倫理のほかに、条文化せられない倫理の中にも、仏教倫理の特色を示しているものが多い。例えば「恩」の倫理などもその一つである。「恩」の思想は、仏教が中国に伝来する以前から、中国思想の一つとしてすでに存在していた。例えば『孟子・梁恵王

※Study on SHION—Preriminary ideas of Buddhist Welfare—(1)

※※Kairyu Shimizu 立正大学社会福祉学部社会福祉学科

キーワード：四恩，恩思想，仏教福祉

上』に「今、恩は以って禽獸に及んで足る」とあり、主恩・厚恩・洪恩などとして用いられている。その意味は「めぐみ、なさけ、おもいやり、いたむ」などである。「主恩」といい、恩が「めぐみ、なさけ」などの意味である点からも、中国古来の恩の思想が上下の関係で考えられていたことがわかる。これに対して仏教の恩の思想は、他人が自己になしてくれたことにたいする「感謝」の意味であり、師の恩・親の恩などの縦の関係もあるが、衆生の恩のように横の関係もある。「恩を知る」(katannu, katavedin), 「恩に報いる」(patikata, patikara)などの語が示すように、「なされたこと」(kata, kṛta)にたいする感謝が恩である。……そしてまた恩を知ることによって、感謝の心が起こり、他にたいしてよいことをなそうという心が生ずる。故に「恩を知るは是大悲の本にして、前業を開くの初門なり」とも説かれるのである⁽²⁾。

平川の説に示されているように、仏教における恩の基本的語義は他者の行為に対する感謝の念であり、そこに恩の方向として縦・横二つの方向が示されていることが特徴とされるのである。つまり、一方で縦型の方向を持つ父母の恩や師長の恩などが説かれつつも、他方で横型の方向を持つ衆生の恩が併説されていることが特徴とされるのである。

このような仏教の恩の思想は仏教の歴史的展開に沿って、さまざまな内容を有しているが、それらはどのように展開していったのであろうか。先行する業績によって概観しておきたい。

まず、初期仏教における恩の用例は、雲井昭善によれば、①社会的な倫理として、人間生活において重要視される恩、②出家者の倫理として、渴愛のように断滅すべき煩惱として位置づけられる恩愛、③在家者・出家者の両者にとっての「恩愛別離」などに示されるような恩愛、の三種類の意味に大別されるとされている⁽³⁾。これら三種類の「恩」のうち、本稿の主題である「四恩思想」への継続という観点から言えば、第一の社会的倫理における恩、すなわち人倫の道としての恩が注目されるのであり、同時に恩に対する自覚ならびに恩を蒙ったことに対する感謝、すなわち知恩・報恩の考えが初期仏教の時点で見られたことも注目されるのである。

つぎに、初期大乘仏教について見てみたい。藤田宏達によれば、初期大乘仏教經典における恩の用例は諸仏への知恩・報恩、および善友（すなわち説法者比丘）への知恩・報恩としての意が中心となっている。すなわち、般若經典群には仏が般若波羅蜜に対する「知恩・知報恩者」とであるとされている。そして、更に、仏陀を理想とし成仏を究極の目的とする菩薩の知恩・報恩が示されているのである。この般若經典群と同様に、『法華経』・『華嚴経』・『維摩経』などにおいても、仏恩・諸仏之恩あるいは善友の恩・師恩などが示され、それらに対する知恩・報恩が説かれているのである⁽⁴⁾。

このように、仏教における恩の思想は「感謝の心」が基本にあり、それを骨子として初期仏教から大乘仏教にいたる歴史的展開の中で展開されていったのである。具体的には真理への恩、真理の体現者である仏への恩、さらに釈尊の教説の伝授者である説法師への恩へと拡大していったと考えられるのであり、その展開の要因としては教義上の必然と同時に、各説成立の時代状況も無視することができないのである。そして、やがてこの恩の思想の系譜から、仏

教の代表的恩思想である「四恩説」が成立するのである。

3 四恩思想について

仏教における恩思想を考える時、その頂点を『正法念処経』や『大乘本生心地観経』に説かれる「四恩」思想とすることは異論のないところであろう。

『正法念処経』は6世紀中頃に漢文に訳出された經典であり、当該所説の中心部分を引用すると、「如聞、説法、有₂四種恩、甚為_レ難_レ報、何等為_レ四、一者母、二者父、三者如来、四者説法法師、若有_レ供₂養此四種人、得₂無量福、現在為₃人之所₃讚歎、於₂未來世、能得₂菩提」とされており、ここには①母恩・②父恩・③如来恩(=仏恩)・④説法法師恩(=師恩)の四恩が示されていることが理解されよう⁽⁵⁾。一方、『大乘本生心地観経』は8世紀末頃に漢文に訳出された經典であり、当該所説の中心部分を引用すると、「我今為_レ汝分₂別演₃説世出世間有恩之處、善男子、汝等所_レ言未_レ可₂正理、何以故、世出世恩有₂其四種、一父母恩、二衆生恩、三国王恩、四三宝恩、如是四恩、一切衆生平等荷負」とあり、ここには先とは異なる①父母恩・②衆生恩・③国王恩・④三宝恩の四恩が提示されているのである⁽⁶⁾。この二經に見られる四恩説について壬生台舜は、「第一説は般若流支によって興和二年に訳出された正法念処経にあるが、梵本が存在していない。しかしそのチベット語訳があり、その内容は漢訳と一致する。第二説は唐の元和六年般若三蔵によって訳された大乘本生心地観経に出るもので、有名な四恩説としてしばしば引用される。衆生恩と国王恩を説くことが特色とされ、殊に国王恩は後世の日本倫理思想に重大な影響を与えた。この両經典の四恩説を比較すると、所説の内容に相違があり、正法念処経は四恩思想の素朴な形式であり、翻訳年次も非常な隔りがあり、仏教文献としては古い四恩説であることが推測されている。またその四恩説は、心地観経のように大きな影響がない。以上二つの四恩説が代表的仏教思想として知られていた。」と位置づけ⁽⁷⁾、さらに、同論文後段において両經の具体的な四恩説の構造について触れ、両經の四項目が世俗の恩恵すなわち人倫の道と出世間の恩恵すなわち宗教的恩恵とに大別されるという共通構造を有することを述べ、「つまり恩ということについて、俗諦と真諦という二門分別的な考え方が働いているわけである。この二門分別の傾向はインド仏教にしばしば採用される説明形式であり、その思考の内面には聖と俗という意識が強く働いている。」として、下の区分をあげているのである⁽⁸⁾。

『正法念処経』〔出世間法〕如来恩・説法師恩

〔世間法〕母恩(個別主義的)・父恩(個別主義的)

『心地観経』〔出世間法〕三宝恩

〔世間法〕父母恩(個別主義的)・衆生恩(普遍主義的)・国王恩(個別主義的)

これら二種の四恩思想のうち、出世間法に関しては如来恩・説法師恩が整理されて仏・法・

僧の三宝への恩である三宝恩にまとめられたのは、これ以前の恩の展開から考えても、また仏教の基本的性格からも当然の項目であり、また、社会的倫理である世間法の母恩・父恩がまとめられて父母恩とされたことも、容易に推測されることであり、これらはあたかも布施思想に関連する三福田思想中に敬田（すなわち三宝）を第一にあげ、恩田（すなわち父母等）を第二とするのと同様に理解されよう。一方、壬生が『大乘本生心地観経』の特色とする衆生恩・国王恩については全く新たな恩思想の展開と考えられるのであり、このうち国王恩は初期仏教においてはむしろ国家権力との関係を否定的にとらえるのが一般的であったにもかかわらず四恩の一とされ、後世日本における恩思想にまで多大な影響を残している点は注意を要する点であろう。この点については、インドの恩思想の論理的発展性の問題および当該經典の成立時点および漢訳出時の社会情勢との関連を含め考察の余地が存在するが、別の機会に譲りたい。

そこで今、本稿で注目したいのは衆生恩である。何故なら、衆生恩は単なる社会的倫理の枠を越え、冒頭に述べたように、布施の必然性すなわち他者援助思想の背景ともなり得る思想であるからである。

いま、『大乘本生心地観経』の衆生恩所説箇所をあげると以下の通りである。

衆生恩者 即無始来 一切衆生輪轉五道₁經₂百千劫₁ 於₂多生中₁互為₂父母₁ 以₃互為₂父母₁故 一切男子即是慈父 一切女人即是悲母 昔生生中有₂大恩₁故 猶₂如現在父母之恩₁等無₂差別₁ 如₁是昔恩猶未₂能₁報 或因₂妄業₁生₂諸違順₁ 以₂執著₁故反為₂其怨₁ 何以故 無明覆₂障宿住智明₁ 不₂了₁前生曾為₂父母₁ 所₂可₁報恩₁互為₂饒益₁ 無₂饒益₁者名為₂不孝₁ 以₂是因緣₁諸衆生類 於₂一切時₁亦有₂大恩₁ 實為₂難₁報 如₁是之事名₂衆生恩₁

ここでは、衆生恩が直訳的には父母恩の展開として示されている。すなわち一切衆生は多生の中で互いに父となり母となるが故に、そこには父母の大恩があるのであり、一切衆生は一切時にその大恩を有する存在であるとしているのである。この説は文言通りに解釈すれば、人間存在が輪廻的存在であり、輪廻を繰り返す中で互いに父母となり子となって関係性を築いて存在しているのであるから、現在世における他人といえどもかつての父母の恩があると理解し、他者に対してその恩を知り、その恩に報いるべきであるという思想に理解できるのである。しかし進んで考察するとき、衆生恩を父母恩の三世にわたる展開とのみ解釈することには問題が残るのである。何故なら、第一には先にあげたように当該經典の四恩説はその冒頭に父母恩をあげており、衆生恩を父母恩の展開とするならば、あえて衆生恩を別立する必要は薄いのではないかという所説構造からの疑問がある。第二には仏教の本来的目的が輪廻からの脱却にあるとすれば、脱却されるべき輪廻論から何故恩思想に新たな項目を付け加えるのかという教義上の疑問である。これらの点で、衆生恩を経文の文言のみによって解釈することは困難であろう。それ故これに対する妥当な解釈が必要となるのである。

さて、仏教が釈迦の教説以来、その根幹となす思想の一つは縁起思想であった。一切の現象

法の相互依存関係を説く縁起説は人間関係にも当てはめられ、すべての人間は互いに他者との関係性の中で存在するとされているのである。それは時間軸に沿った親・子の関係についても言われるが、また同時代的に存在するすべての人間の間の相互関係としても言われるのである。衆生恩も実にこの縁起思想によって解釈されるべきであろう。人間存在が関係性において存在するということは、個が一切衆生との間に関係を形成しつつ存在するということであり、それは他者によって生かされている自己という認識を生じさせるのである。更に個は互いに他者（衆生）によって支えられてはじめて存在するのであり、ここに衆生に対する恩という思想が成立するのではなからうか。それ故、人間は縁起的に互いに他者（衆生）との間で関係を取り結んではじめて存在し得ることを認識し（知恩）、他者に対して感謝の念を捧げること（報恩）が必要なのであり、それこそが衆生恩に対する知恩・報恩であると理解されるのである。

4 結

仏教における四恩説のなかでも衆生恩について上来概観してきたが、衆生恩に見られたのは縁起思想を背景として一切衆生の関係性を重視し、人間はその関係性によってのみ存在し得るのであって、それを生かされているという「恩」と認識しようとする仏教的特徴であったと言えよう。この思想の根底には冒頭の平川所説からもわかるように横型の人間関係理念、すなわち自己と他者をともに一切衆生と見、そこに何らの差別も見出さない平等性論理がみられるのである。そして、この恩を認識することによって、自己を生かしてくれる他者に対する感謝を起こし、他者に対して報恩行為を実践する心が起こるのである。そして、この報恩が現実社会における社会的活動主体の契機となる時、四恩思想は仏教福祉の重要な背景思想となるのであろう。

以上

〔注〕

- (1) 吉田久一著『日本社会事業の歴史』（全訂版）pp.15～19
- (2) 平川彰稿「原始仏教の倫理」（壬生台舜編『仏教の倫理思想とその展開』pp.30～31）
- (3) 雲井昭善稿「原始仏教における恩の思想」（仏教思想研究会編『仏教思想4 恩』所収）
- (4) 藤田宏達稿「初期大乘経典にあらわれた恩」（仏教思想研究会編 前掲書所収）
- (5) 『正法念処経』巻第61（大正17巻359 a～c）
- (6) 『大乘本生心地観経』巻第2（大正3巻297 a～299 b）
- (7) 壬生台舜稿「仏教における恩の語義」（壬生編 前掲書p.320）
- (8) 注(7) p.326
- (9) 注(6) 参照